奥様との出会い

切ない気持ちは否めなかった。その枝を切り落とすのは身を引き裂かれる思いだ。

いくら自分の木ではないとはいえ、三年以上もその松の木と向き合い、剪定し、守ってきたのだ。その木を伐採して、抜根するというのは、仕事とはいえ、あまりにも寂しすぎた。

だが仕方がない。家主にやれと言われたらやるしかないのだ。その松のお陰で遠くの景観が悪いと言われ、思い切って伐採してくれと言われてしまったのだ。早く言えば庭の断捨離のようなものだ。

それにしても手にかけてきた松を伐採するというのは、可愛がっていたペットを殺処分するのと同じで、本当に切なかった。ノコギリで枝を切るときは、自分の腕を切り落とすように心が痛んだ。

室田雄介（むろたゆうすけ）は父の仕事を継いだ庭師だった。もともと庭師になるつもりなどなかったが、高校在学中にヤンチャをしていて、学校をクビになってしまったのだ。嫌いな教師を授業中に殴ってしまった。

そのことで父に大激怒された。両親が揃って学校に謝罪に行ったが、結局報われず、警察沙汰にしない代わりに大学処分になってしまったのだ。あと少しで卒業という高校三年生のときだった。

父は退学になった雄介を家で遊ばせてはおけないと言い出し、自分の仕事を手伝わせることにしたのだ。無理やり仕事に連れていかれた彼は、半

分不貞腐れながら仕事をしていた。

その態度を父は横目で見ていたが、あまり厳しく言ってもよくないと思ったのだろう。雄介を叱ることもなく、そのまま放置していた。

職人が切り落とした小枝や葉っぱを下で掃除する作業をしていたが、伸び放題に伸びた木を剪定して、美しく生まれ変わっていく様を見ていたら仕事が楽しくなってきたのだ。自分もあんな風に剪定して木を美しく仕上げたいと思うようになってきた。

そう思うと、気持ちを切り替えて、下働きだった仕事も真剣にするようになり、少しでも庭にゴミが落ちていたら気になるようになってしまったのだ。

「お前は中卒なんだから、しっかり手に職をつけて、将来生きていけるようにならないとダメだ」と父に言われた。

庭師と言ってもいろんな仕事がある。木の剪定はもちろんだが、芝生を植えたり、石を並べたり、頼まれた庭をお客さんの希望通りに作っていくのも仕事だった。要するに庭のなんでも屋みたいなものだった。

たとえば犬を庭で放し飼いにしている家なら、犬が遊べるような庭を作って欲しいと依頼されることもある。犬好きなお客さんが庭にドッグランを作って欲しいというのだ。どんな庭を作れば犬が喜ぶのか、犬に聞いてみないとわからないので、そこでは経験の差がものを言う。庭師は犬の性質や、好きな物を理解していないと務まらないということになる。

そういうことを考えると仕事の幅は無限大だ。木の名前だけを覚えても仕事にならないということだ。

お客さんはいろんなことを要求してくる。中にはやったこともない仕事を頼まれることもある。雄介は父と仕事をしながら、そういうことを学ん

でいった。

また現場が遠いと朝早く出発することもある。仕事の依頼は近場だけではない。県外からも仕事を頼まれることがあるのだ。父などは一か月ほど出張に出たこともあるほどだ。そのときは報酬と条件がよかったので、遠くても引き受けたそうだった。

この仕事もやり始めると面白いことに気づいた。学校で勉強をしているよりもずっと面白い。雄介は結果的にこの方が良かったと思うようになっていた。

そして仕事をしているときの父がカッコいいのだ。それも気に入っていた。普段は雄介のことになると厳しく叱ってくるのだが、それも腹が立たなくなってきた。いつしか父を尊敬するようになっていたのだ。

父の仕事は素人目に見ても完璧だった。一緒に仕事をするまでは、父の

仕事など見たことがなかったので、叱られたりすると不貞腐れたものだったが、父の仕事を見るようになってからは、尊敬の眼差しになり、叱られる時も素直に言うことを聞けるようになった。威張るだけのことはあると思ったのだ。

自分も早く父のような一人前の庭師になりたいと強く思うようになっていった。

だが、そんなときに転機が訪れた。父の仕事に就いて三年ほど経ったときに、父がくも膜下出血で帰らぬ人になってしまったのだ。

自分は父の仕事の後を継ぐつもりで懸命にやってきたのだが、その父が亡くなり、父が運営していた小さな会社も無くなってしまったのだ。十人ほど社員がいたのだが、みんな散り散りばらばらに去っていった。

雄介は自分の身の振り方について考えた。父についていれば将来は安泰

だと思っていたのだが、そんなに上手くはいかなかった。これからどうすればいいのか分からなくなってしまったのだ。

それでも一度足を踏み入れた世界だったので、簡単には辞めたくなかったし、自分にはこれしかないと思っていた。求人で庭師の仕事を探して、なんとか見つけることができた。父のやり方とは違っていて、戸惑うことも多かったが、そこでの仕事を覚えて八年ほど働き、ようやく独立して自立したところだった。

それでもまだ得意客は二、三軒ほどしかない。鳴かず飛ばずの状態だった。これではまだまだ食べてはいけない。今は元いた会社を手伝いながら生計を立てている状態だった。そこの社長は「いつでも来ていい」と言ってくれている。雄介のことを気に入ってくれているのでありがたかった。

社長自身も自分が会社を起こしたとき、同じような経験をしているらし

い。開業したのはいいものの、まったくお客さんが付かずに苦労したと、笑いながら話してくれた。

そんなときだった。一本の電話がかかってきた。雄介は意気揚々とその電話を取ったのだ。

「はい、室田造園です」

彼は張り切って声を送った。

「あの、仕事をお願いしたいのですが」

相手は中年男性のようだった。やっぱり仕事の依頼だった。それも新規の申し込みだ。絶対に逃がさないという強い気持ちだった。

「毎度ありがとうございます」

その電話で早速相手の住所と連絡先を聞き、打ち合わせの日時を決める。相手は「朝倉」と名乗った。朝倉は忙しい身だと言い、なるべく早くとい

うことだった。

「もしなんでしたら、今からでもお伺いできますが」

「そうしてもらえるとありがたい」

住所を見ると、近い距離だった。そこなら二〇分もあれば行ける。彼は早速、仕事用の軽トラに乗って、相手の自宅に向かった。

そこへ着くと、思った通り、高い塀に囲まれた屋敷だった。庭師に仕事を依頼してくるのは広い庭をもった家が多い。そういう家は富裕層であることが多かった。

塀の上から何本もの木が頭を出していた。彼は腕が鳴ると思いながら、門扉に取り付けられたインターホンを押した。

「はい、どちらさまでしょうか？」

家政婦らしき女性の声が聞こえた。

「おはようございます。先ほどお電話をいただきました室田造園です」
「少々お待ちください」
そう言われたので、少し待っていると。大きな門の横にある小さなドアが開いた。
「おはようございます。どうぞ」
エプロンをした家政婦らしき女性が姿を見せた。長い髪を後ろで束ねた何とも言えない地味な女性だった。お金持ちのオーラはないので、やはりこの家の家政婦のようだ。
彼は「ありがとうございます」と言って中に入り、その女性のあとをついていった。
玄関へ向かう間にも雄介は周りの庭にぐるりと視線を走らせた。庭を囲うように木が植えられていた。剪定しなければならない木がたくさんある。

パッと見ただけだが、完璧な和風の日本庭園だった。建物は一〇億円越えで、敷地面積は六〇〇坪というところだろう。

家政婦の女性は玄関のドアを開けて、雄介を中に招き入れてくれた。スリッパを出してくれたので、それに足を通して、さらに女性についていく。

応接間のような部屋に通され「こちらでおまちください」と言われた。彼はそこのソファに腰を下ろして待つことになった。

そこの窓からも外の中庭らしきスペースが見えた。ちょうど建物の裏側になるのだろうか？　そちら側にはあまり手を加えていないようで、雑草がちらほら見える。雄介はその部分も自分が見栄え良く手掛けたいと思った。

そう思っていると、扉が開いて依頼主が姿を見せた。

「いやぁ、悪い悪い、お待たせしちゃったね」

少しお腹の出た、いかにもという感じの主人が入って来た。スーツ姿だ。人の良さそうな雰囲気を持っているので雄介は安堵した。そしてそのあとを寄り添うように女性が入って来た。先ほどの家政婦とは違い、こちらは清楚なブラウスを着ており、髪型はショートヘアで、きちんとセットされていた。セレブのような雰囲気を持っている。おそらく妻なのだろう。

夫婦は雄介の目の前のソファに並んで座った。

「突然電話して、急なことで申し訳ないね」

「いえ、とんでもないです」

彼は好印象を与えようと、笑顔で頭を下げた。

「朝倉といいます」

朝倉は名刺を差し出した。雄介も名刺を渡して交換をした。

「いや、実はね、うちに専属で入ってくれていた造園屋のご主人が体を壊

してしまいましてね、仕事を続けられなくなってしまったんですよ」

朝倉の話はこうだった。いつも来てくれている造園屋が腰を痛めてしまい、それを機会に廃業してしまったそうだった。もう高齢だったそうだ。

朝倉との信頼関係も出来ていたので、いつもその庭師に任せていたのだが、そういう事情で、新たに腕のいい庭師を探していたそうだった。

だが、朝倉も仕事が忙しくて、なかなかそちらに着手することができずに半年ほど庭は放置状態だったらしい。

今回は雄介の得意先のお客さんの紹介があって、ぜひにと、仕事を依頼してくれたのだ。

「室田さんの仕事が非常に丁寧だと聞きましてね、ぜひうちの庭を見てもらいたいと思ったわけですが、お願いできますかね？」

「はい、それもう、ぜひやらせていただきたいです」

雄介は張り切って言った。この庭ならしばらく食いっぱぐれることはない。願ってもない話だった。彼は自分にツキが回って来たと確信した。

「いつから来ていただいてもいいんです。私も自分の身が忙しいので、今日しかお会いできるときがないので、急遽来ていただいたんですが、そちらも他の客を抱えていると思いますので、手が空いたときに来ていただけば結構です。私はこれから社に戻ります。明日からはまた海外で、しばらくは帰ってくることができません。そんなわけで、あとのことは妻と相談していただければ結構ですので」

朝倉は隣に座っている奥さんを紹介してくれた。その奥さんが軽く頭を下げる。先ほどから彼女が雄介のことをじっと見ているのが気になっていた。

「これは妻の美智子（みちこ）です」

隣に座っている妻の姿が気になっていたが、あまりジロジロ見るわけにもいかないので、朝倉の話に集中していたが、改めて見ると洗練された高貴な美しさを持っていた。よく見ると三十代前半に見える。朝倉はきっと五〇代だろう。すると二〇才も年の離れた妻をもらったということか……。お金持ちの成せることだと思えて羨ましかった。

美智子は白いブラウスに花柄のスカートを穿いていた。メイクは多少濃いめではあるが、下品ではない。透き通るような白い首筋がとても印象的で、雄介の目を奪った。足首はキュッと締まっており、引き締まった体を証明しているようだった。しっとりとした大人の美しさを醸し出している。この家の妻に相応しい容姿だった。

「美智子です。よろしくお願いします」
彼女は控えめに挨拶をした。彼も慌てて「室田です、よろしくお願いします」と言った。
そして話していると、途中でドアを開けて、先ほどの家政婦がお茶を持って入って来た。トレイに乗せていたのは緑茶ではなくて紅茶だった。白いティーカップが三つ、テーブルの上に置かれた。
「こちらは我が家の家政婦の大山です」
「大山千沙（おおやまちさ）と申します。よろしくお願いします」
朝倉の紹介のあとに千沙がお辞儀をした。先ほどはただのオバサンのように見えたが、よく見ると年齢は四〇前に見えた。ほどよく化粧をしていて地味な美人という感じだ。美智子と比べると、やはりその差は歴然であ

る。

「今日からお世話になります、庭師の室田です。よろしくお願いします」

雄介も丁寧に挨拶をした。この家では家政婦かもしれないが、雄介にとっては大事なお客様の一人なのだ。

「千沙さん、あなたも一緒に」

美智子はそう言って、千沙にも同席するように言った。彼女は返事をして、傍にあった小さな椅子を持ってきてそこに座った。

「千沙さんはね、元はイタリアンのシェフだった人なんです。だからお料理がとっても美味しいの」

「そんな……、大したものではございません」

美智子がそう言うと、千沙は恥ずかしそうに微笑みながら謙遜した。

「それから室田さんには、もう一つお願いがありまして」

朝倉が言った。
「なんでしょうか？」
「実はあなたには庭の他にも家のことを少しやっていただけたらと思いまして、ご覧の通りウチには女手しかありません。重いものを持ったり、高いところでの作業をすることができないんです。そこであなたに少しその辺りもお手伝いいただけたらと思いまして。もちろんそれ相当の色はつけさせていただきます」
「承知しました。お安い御用です。家事で何かありましたら、何でも言ってください。やらせていただきます」
普通の造園屋ならそこまでの仕事は断っていると思うが、雄介はまだ駆け出しの造園屋だ。今は喉から手が出るほど得意先が欲しかった。客を選ぶ立場ではないのだ。重いものでも、電球の交換でも、犬の散歩でも何で

もやるつもりだった。

「どうか、よろしくお願いします」

朝倉は雄介に頭を下げた。会社では代表取締役という立場だろうが、雄介に対しては腰が低かった。ものすごく好感が持てる人だ。偉そうにしないところがすごくいい。こういう人だから、仕事も上手くいき、社員もついてくるのだろう。

朝倉は腕時計を見て言った。

「では、私はそろそろ。あとは妻に任せていますので、これの我がままを聞いてやってください」

笑いながらそう言って、朝倉は部屋から出て行った。これから会社に行くようだ。家政婦の千沙は立ち上がり、朝倉のあとを追った。玄関までお見送りをするようだった。

「では、早速ですが、庭を見させてもらってよろしいでしょうか？」
雄介がそう言うと、「どうぞ」と言って美智子が立ち上がった。

玄関で靴を履き、庭に案内してもらった。美智子と一緒に庭を回ることになり、雄介はいささか緊張した。こんな美女と一緒に歩くと、ちょっとしたデートをしているかのような錯覚に陥った。でもこれは仕事なのだ。美智子にしっかりと要望を聞いて、その通りにしなければならない。
庭に出て見ると、見事な日本庭園が広がっていた。たしか半年前までは庭師が入って手入れをしていたらしいが、今はそれがなくなり、完全な放置状態だ。
「だいぶ草が生えてしまってますね」
「そうなんです。私たちではそこまで手が回らなくて……。主人は忙しい

し、綺麗な庭がどんどんみすぼらしくなっていくんです」

容姿のせいだろうか？　彼女の声まで色っぽくて、セクシーな気がする。実際には普通の女性の声なのかもしれないが、美智子が喋ると声まで美しいのだ。

「そうですね……これはすぐにでも手入れをしないとダメですね」

「すいません。突然のお願いでご無理を言ってしまって」

「いえいえ、とんでもないですよ。仕事をいただけて嬉しい限りです」

雄介はそう言って笑った。

なるほど、この奥さんでは庭の草取りなどしないだろう。こんな綺麗な手で草を取ったら汚れてしまうし、広範囲の草取りは結構重労働だ。美智子には無理だ。雄介にはその姿が想像できない。この人は優雅に午後の紅茶でも飲んでいるのがお似合いだと思った。

「先ほど、ご主人は海外に飛ぶと言っていましたが、出張ですか？」
雄介がそう言うと、美智子は大きく頷いた。
「出張というよりも、もう向こうに住んでいる感じです。家に帰るのは三か月に一度とか、長い時には半年も帰ってこないときもありました」
「そんなに！　それはお忙しいですね」
「今回も二か月ぶりなんですよ」
少し拗ねたような顔になって美智子は言った。その姿がちょっと可愛いく見えた。
「それで早速休みもせずに海外に？」
「そうなんです。これじゃあ何のために結婚したのかわかりません。ただの留守番ですから」
「そうなんですか……。それはお寂しいでしょ？」

と言ったあとに雄介はマズいと思い、「あ、決して変な意味では……」と付け加えた。

美智子は口元を隠して、クスクスと笑った。

そんなに長く朝倉が家を空けているなら、美智子はあっちの方はどうしているのだろうと、いらぬ心配をしてしまった。

見たところ彼女は妖艶な姿をしている。自分にはとても手が届かない高級な美人という感じだった。しかし、いくらセレブでも性欲はあると思うのだ。それは余計なお世話だった。

「室田さん、いま何を考えてるか当てましょうか？」

「え？」

「主人がいない間、私がこの体を持て余していると思っていません？」

「あ、ああ……いえ、そんなことは……。あ、あの、何かお庭のことでご

希望があれば、伺いますが……」

雄介は慌ててそう言った。美智子は楽しそうに笑っている。笑うと本当に癒される人だった。

あまりジロジロ見てはいけないと思いながらも、ついつい美しいバストラインに目がいってしまうのだ。キュッと引き締まっている足首にもだ。こんな奥様と一度でいいからお手合わせしてみたいと想像する。雄介の頭の中に彼女の裸の姿が浮かんできた。それはしてはいけない想像だった。

でも想像するだけなら誰にもわからない。彼女とキスをして抱き合っている妄想が膨らんでしまう。こんな奥さんと一緒に庭を歩けるだけでも幸せだと思った。